

Fact Sheet

長谷川 逸子

——人と人、人と自然との関わりを生む建築を目指して ①

1. 建築に向かう

私は子供の頃、魅力的な人に出会うたびに「植物学者になりたい」「数学者になりたい」と次々に思っては興奮していた。大学受験の方向を決めなければならない高校2年生の時、隣席になった友人のお父様が住宅の設計をしており、すごく楽しそうに仕事している様子を聞かされ、初めて「建築って何?」と本屋で調べた。私の周りには見当たらない仕事だからである。パースという外観を描き、模型をつくり、図面を書いて建物をつくる仕事と分かったと、自分に向いていると思ってしまった。



それまでは、「芸大に行き、画家になる」と母に話していたが、「家でも出来る」と日本画を描く母に反対されていた。しかし、どうしても京都の大学に行き京都で生活をしたいという想いが、捨てられないでいた。母から「社会性のある仕事をするなら出かけていい」と聞いていたから、建築に向かう話をして励まされる。しかし、そのころ社会は科学技術の進歩がテーマで、建築学科は工学部にしかなかった。良妻賢母を掲げていた女学校の進路担当者に「国立大学の建築科には女性がいないので入試に反対だ」と言われて拒否され、登校拒否を初めてした。その後、姉の紹介で入学時期間際に私立の関東学院大学工学部建築学科に進む。工学部の大学も、後に就職した菊竹事務所も男性ばかりだった。

2. 男性社会の中で働く

大学2年生の後半に初めて住宅の設計の実習授業があり、模型も作った。知らないうちに先生がその模型を早稲田大学で開催された学生会議の展覧会に提出していた。それがその頃日本で一番活躍されていた若い建築家・菊竹清訓さんの目に留まり、京都国際会議場のコンペや、その後も浅川アパートの設計に参加させていただくことになった。菊竹事務所は、東京大学と早稲田大学を一番で卒業したスタッフしかいないというだけあって、すごい熱気があった。そこでアルバイトした後は、大学の授業に積極的に出席するようになった。

菊竹さんの「柱は空間に場を与え床は空間を限定する」という考えのもと、建築設計が進められる事を知り、菊竹事務所の構造を担当する松井源吾先生の研究室で構造を専攻した。

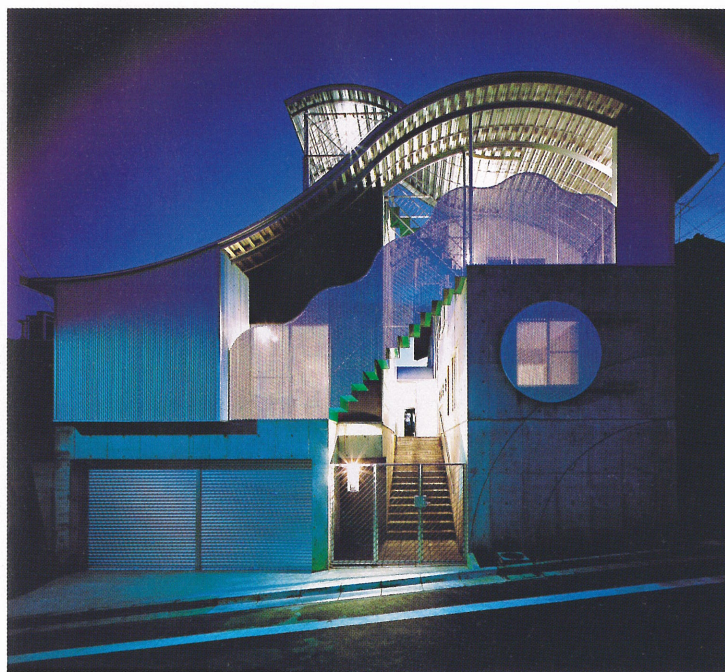
(裏面に続く)

Fact Sheet

長谷川 逸子

—— 人と人、人と自然との関わりを生む建築を目指して ①

構造を研究することから電気や空調なども含めたエンジニアリングにのめり込んでゆく。高校生の頃に数学や物理などが得意だったことが生かせることになった。そして卒業後は菊竹事務所に就職した。先生のファーストイメージをリアルにするお手伝いから、家具から照明やサインなどのデザインまで、トータルに建築を設計させていただき、夢中で働く。男性ス



練馬の住宅(1986年竣工)

トップばかりのアトリエにあって、この上なく菊竹さんに高い評価を受けて仕事をさせていただく。5年間休みもなく建築の設計に没頭した。

3. 住宅設計を目指して東京工業大学へ

建築を考えるということを一箇中して、それ以外のことを考える暇がなくなる。段々沢山あった陶芸や油絵やテニスやヨットなどの趣味をみんなやめても仕事をするを楽しんだ。

菊竹事務所で大規模公共建築の設計を続けるうち、自分でデザインした家具が身近に感じられる。次第に小さなスケールの空間を設計したいと考えるようになった。その頃建築雑誌でみた篠原一男先生の考えに惹かれて、東京工業大学で学ぶことにした。〈民家はきのこ〉という先生の言葉が好きで、全国の民家を2年間見歩いた。きのこの菌は着手した土地の気象や風土で独自のものとして育つ。きのこも民家も同じだ。都市建築を設計する時も、敷地の記憶を掘り起こしながら潜在力を引き出し、土地に根付いた建築をつくりたいと考えた。物理的空間だけでなく、時間次元も導入し、持続することで未来に開かれた状態を立ち上げる。日本は湿度が高く、皮膚感覚から色彩感覚、空間の匂いまで影響する。住宅空間に快適さを実現させるには、光や風などの自然エネルギーの導入や、素材の地産地消の選択などが必要になる。

(長谷川逸子・建築計画工房株式会社代表 長谷川逸子)

Fact Sheet

長谷川 逸子

— 人と人、人と自然との関わりを生む建築を目指して ②

4. ワークショップで地域の生活から歴史まで知る

これまでの仕事を通して、新しい公共建築を提案したいと考えてきた。そのために、その地域の人々の生活から歴史まで利用者を通じて知るため、意見交換や具体的利用体験のワークショップを行ってきた。設計のためだけでなく、各地で<家をつくろう>という子供ワークショップはたくさんやってきた。最近では、2011年3月11日の東日本大震災の爪痕の残る塩竈市生涯学習センターで行った。子供たちはショックから立ち直ろうと夢の家を描く。家が流された子、壊れた子、流されなかった山の方の子、いろいろの子供の集まりだった。その子供たちみんなの集中力に驚かされ、未来に立ち向かってゆこうとするエネルギーを感じた。

建築を設計することと平行して、住宅では住まい手と、公共建築では市民と、生の声で繋がり、地域固有の価値を発見してゆき、利用者と創発という概念を取りながら議論を繰り返す。建築が楽しい生活の拠り所になるような地域づくりに結びつけて、地域の環境と連続性を捕まえて作業してゆく。

5. 創造都市に向かう場づくり

具体的には、「ユニバーサリゼーション」という考えを揚げ、新しい共同性を確保するためのモデルをつくり、コミュニケーションのあり方そのものをデザインしたいと考えてきた。ボランティアを評価し、地域のもの向き合い、美しい風景を実現させるため、ランドスケープと建築が一体の「ランドスケープアーキテクチャー」を考える事でエコロジカルな環境づくりも実行し、<第二の自然としての建築>を立ち上げる。

市民参加の運営プログラムや市民の新しい繋がりの中での創造的生活の充実を目指すため、特に芸術活動や伝統芸能、ものづくりからひとづくりまで取り組んでゆくインクルーシブな活動を同時に行ってきた。地域固有の文化は閉鎖的で変わらないものではなく、異種の文化の影響を受け変動しながら成熟してゆくもので、地域のアイデンティティを洗練させてゆくダイナミックな作業と捉えている。



新潟市民芸術文化会館(1998年竣工)



(裏面に続く)

Fact Sheet

長谷川 逸子

——人と人、人と自然との関わりを生む建築を目指して ②

今日のグローバルな時代にあって、改めてリージョナルな文化芸術をリフレッシュして、生活を豊かにするように衣食住の細部に深い芸術価値を見だし、活性化する方向を見いだそうとやっている。一つの建築が立ち上がることで、まちに新しいレストランが…ブティックが…本屋が…、と展開してゆき、賑わいが起こり、クリエイティブシティが生まれる事を目指して、建築も立ち上げてゆくことを行っている。

略歴

年代	
1941年	静岡県焼津市に生まれる
1964年	関東学院大学工学部建築学科卒業
1964 - 69年	菊竹清訓建築設計事務所勤務
1969 - 71年	東京工業大学工学部建築学科大学院研究生
1971 - 79年	東京工業大学工学部篠原一男研究室に勤務
1980年	長谷川逸子・建築計画工房株式会社設立
1988 - 90年	早稲田大学非常勤講師
1990 - 92年	東京工業大学非常勤講師
1992 - 93年	ハーバード大学客員教授
1994 - 96年	九州大学非常勤講師
1997年	王立英国建築家協会名誉会員 (Royal Institute of British Architects)
1999 - 01年	法政大学大学院客員教授
2001年	ロンドン大学名誉学位受賞
2001年 -	関東学院大学大学院客員教授
2006年	アメリカ建築家協会名誉会員 (American Institute of Architects)

(長谷川逸子・建築計画工房株式会社代表 長谷川逸子)